

はじめに

輪廻とは、流れること、ぐるぐると廻ること、生と死とを繰り返すこと。転生とは、転々と生死を繰り返すこと。輪廻転生とは、衆生が解脱しないで三界六道を転々と廻ること。

輪廻の業因は煩惱。煩惱から業（行為）が生じ、業から苦が生じ、苦から逃れようとして煩惱を生ず。こうして迷苦の世界を転々と廻る。

一、無量義経における用例

説法品第二

起不善念。造衆惡業。輪廻六趣。受諸苦毒。無量億劫。不能自出。

「不善の念を起こし、衆の惡業を造つて六趣に輪廻し、諸の苦毒を受けて、無量億劫自ら出づること能わず。」（開結一五頁）。

二、法華経における用例

方便品第二

以諸欲因縁 墜墮三惡道 輪廻六趣中 備受諸苦毒

「諸欲の因縁を以て三惡道に墜墮し、六趣の中に輪廻して備さに諸の苦毒を受く。」（開結一〇八―一一頁）。

隨喜功德品第十八

又阿逸多。若人為是經故。往詣僧坊。若坐。若立。須臾聽受。緣是功德。轉身所生。得好上妙。象馬車乘。珍寶輦輿。及乘天宮。若復有人。於講法處坐。更有人來。勸令坐聽。若分座令坐。是人功德。轉身得帝釈坐處。若梵天王坐處。若轉輪聖王。所坐之處。阿逸多。若復有人。語余人言。有經名法華。可共往聽。即受其教。乃至須臾間聞。是人功德。轉身得与。陀羅尼菩薩。共生一處。利根智慧。

「又阿逸多、若し人は是の經の為の故に僧坊に往詣して、若しは坐し若しは立ち須臾も聽受せん。是の功德に縁つて、身を転じて生れん所には好き上妙の象馬・車乘・珍寶の輦輿を得、及び天宮に乗ぜん。若し復人有つて講法の処において坐せん。更に人の來たることあらんに勧めて坐して聽かしめ、若しは座を分つて坐せしめん。是の人の功德、身を轉じて帝釈の坐處、若

しは梵天王の坐処、若しは転輪聖王の所坐之処を得ん。阿逸多、若し復人有つて余人に語つて言く、経有り、法華と名づけたてまつる。共に往て聴くべしと。即ち其の教を受けて乃至須臾の間も聞かん。是の人の功德は、身を転じて陀羅尼菩薩と共に一処に生づることを得ん。利根にして智慧あらん。」(開結四五六〜四五七頁)。

三、日蓮聖人遺文における用例

1、輪廻(輪回)

『唱法華題目鈔』

又法華経をおろか(疎略)に得心結縁の衆もあり。其人人当座中間に不退の位に入らずして、三千塵点劫をへたり。其間又つぶさに六道四生に輪回し、今日釈迦如来の法華経を説給に不退位に入る。所謂舍利弗・目連・迦葉・阿難等是也。猶猶信心薄者は、当ても覺らずして未来無数劫を経べきか。不知、我等も大通智勝仏の十六人の結縁の衆にもあるらん。此結縁の衆をば天台・妙楽は名字・觀行の位にかなひたる人なりと定給へり。

(一八五頁。日朝写本。録内御書)。

『四恩鈔』

人間に生を受て是程の悦は何事か候べき。凡夫の習我とはげみて菩提心を発して、後生を願といへども、自思ひ出し十二時の間に一時二時こそははげみ候へ。是は思ひ出さぬにも御経をよみ、読ざるにも法華経を行ずるにて候か。無量劫の間、六道四生を輪回し候けるには或は謀叛をおこし強盜夜打等の罪にてこそ国主より禁をも蒙り流罪死罪にも行はれ候らめ。是は法華経を弘るかと思心の強盛なりしに依て、悪業の衆生に讒言せられて、かゝる身になりて候へば、定て後生の勤にはなりなんと覺候。

(二三六〜二三七頁。日朝写本。録内御書)。

『女人成仏鈔』

我等衆生、三界二十五有のちまたに輪回せし事、鳥の林に移るが如く、死しては生じ、生じては死し、車の場に回るが如く、始め終りもなく、死し生ずる悪業深重の衆生也。爰を以て心地觀経云有情輪回生六道猶如車輪無始終或為父母為男女生生世世互有恩等云云。法華経二卷云三界無安猶如火宅衆苦充滿云云。

涅槃経二十二云菩薩摩訶薩觀諸衆生為色香味触因縁故從昔無量無數劫以來常受苦惱。一一衆生一劫之中所積身骨如王舍城毘富羅山所飲乳汁如四海水身所出血多四海水父母兄弟妻子眷屬命終涕泣所出目淚多四大海水。尽地草木為四寸籌以

數父母亦不能尽。無量劫已來或在地獄畜生餓鬼所受行苦不可稱計。亦一切衆生骸骨耶云云。(三三三頁。録外御書)。

『藥王品得意抄』

女人往生成仏段。經文云若如來滅後後五百歲中若有女人聞是經典如説修行於此命終即往安樂世界阿彌陀仏大菩薩衆圍遶住処生蓮華中宝座之上等云云。問曰此經此品殊女人往生説有何故乎。答曰仏意難測此義難決歟。但加一料簡女人衆罪根本破国之源也。故内外典多禁之。其中以外典論之三從。三從申三シタカウト云也。一幼從父母、嫁從夫、老從子。此有三障世間不自在。以内典論之有五障。五障者一六道輪回間如男子不作大梵天王。二不作帝釈。三不作魔王。四不作輪聖王。五常留六道出三界不成仏「超日月三昧經文也」。銀色女經云三世諸仏眼墮落於大地法界諸女人永無成仏期等云云。(三四一頁。眞蹟斷)。

『聖愚問答鈔』

夫生を受しより死を免れざる理りは、賢き御門より卑き民に至るまで人ごとに是を知といへども、實に是を大事とし是を歎く者、千万人に一人も有がたし。無常の現起するを見ては、疎きをば恐れ親きをば歎くといへども、先立ははかなく、留るはかしこきやうに思て、昨日は彼のわざ今日は此事とて、徒らに世間の五欲にほだされて、白駒のかげ過やすく、羊の歩み近づく事をしらずして、空く衣食の獄につながれ、徒らに名利の穴にをち、三途の旧里に帰り、六道のちまたに輪回せん事、有心人誰か不歎、誰か不悲。

(三五〇〜三五一頁。延山本。録外御書)。

『聖愚問答鈔』

悲哉痛哉。我等無始より已來、無明の酒に酔て六道四生に輪回して、或時は焦熱大焦熱の炎にむせび、或時は紅蓮大紅蓮の氷にとぢられ、或時は餓鬼飢渴の悲みに値て、五百生の間飲食の名をも聞ず。(三五一頁。延山本。録外御書)。

『開目抄』

此に日蓮案云 世すでに末代に入て二百余年、辺土に生をうく。其上下賤、其上貧道の身なり。輪回六趣の間人天の大王と生て、万民をなびかす事、大風の小木の枝を吹がごとくせし時も仏にならず。大小乗經の外凡内凡の大菩薩と修あがり、一劫二劫無量劫を経て菩薩の行を立、すでに不退に入ぬべかりし時も、強盛の惡縁にをとされて仏にもならず。しらず大通結縁の第三類の在世をもれたるか、久遠五百の退転して今に來か。法華經を行ぜし程に、世間の惡縁・王難・外道の難・小乗經の難などは忍し程に、権大乘・実大乘經極たるやうなる道綽・善導・法然等がごとくなる惡魔の身に入たる者、法華經をつよくほめ

あげ、機をあながちに下し、理深解微と立、未有一人得者千中無一等とすかししものに、無量生が間、恒河沙度すかされて権経に墮ぬ。権経より小乘経に墮ぬ。外道外典に墮ぬ。結句は悪道に墮けりと深此をしれり。
(五五六頁。曾存。録内御書)。

『大井莊司入道殿御返事』

有情輪廻生死六道と申て、我等が天竺に於て師子と生れ、漢土日本に於て狼野干と生れ、天には鷗鷺、地には鹿蛇と生れしこと数をしらず。或は鷹の前の雉、猫の前の鼠と生れ、生ながら頭をつゝき、しゝむらをかまれしこと数をしらず。(一一四三頁。本満寺本。録外御書)。

『曾谷殿御返事』

日蓮は其人にも非ず、又御使にもあらざれども、先序分にあらあら弘候也。既に上行菩薩釈迦如来より妙法の智水を受けて、末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給。是智慧の義也。釈尊より上行菩薩へ譲与へ給。然るに日蓮又日本国にして此法門を弘。又是には摠別の二義あり。摠別の二義少も相そむけば成仏思もよらず。輪廻生死のもといたらん。例せば大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は、全弥陀・薬師に遇て成仏せず。譬ば大海の水を家内へくみ(汲)来らんには家内の者皆縁をふるべき也。然ども汲来るところの大海の一滴を閣て、又他方の大海の水を求ん事は大僻案也、大愚痴也。法華経の大海の智慧の水を受たる根源の師を忘れて、余へ心をうつさば必輪廻生死のわざはいなるべし。(一一五三〜一一五四頁。延山本。録外御書)。

『松野殿後家尼御前御返事』

法華経第五卷安樂行品云文殊師利此法華経於無量國中乃至名字不可得聞云云此文の心は、我等衆生の三界六道に輪廻せし事、或は天に生れ、或は人に生れ、或は地獄に生れ、或は餓鬼に生れ、畜生に生れ、無量の国に生をうけて無辺の苦しみをうけて、たのしみにあひしかども、一度も法華経の国には生ぜず。たまたま生れたりといへども、南無妙法蓮華経と唱へず。となふる事はゆめにもなし。人の申をも聞かず。(一六二七頁。日朝本。録内御書)。

『身延山御書』

此等をさまざま思つづけて観念の牀の上に夢を結べば、妻恋鹿の音に目をさまし、我身の内に三諦即一一心三観の月曇り無く澄けるを、無明深重の雲引覆つゝ、昔より今に至まで生死の九界に輪廻する事、此砌にしられつゝ自かくぞ思つづける。立わたる身のうき雲も晴ぬべしたえぬ御法の驚の山風。

日蓮

花押

(一九二三—一九二四頁。日意本。平賀本。録内御書)。

『秀句十勝抄』

日蓮疑云 法華・天台・妙樂・伝教心許 大日經等即身成仏乎。慈覺・智証等許之。安慧・安然等又許之。随日本国末学許之。菩提心論云「此論龍猛菩薩造不空訳。或云不空造。」唯真言法中即身成仏故是説三摩地法。於諸教中闕而不書。又云 勝義行願三摩地「云云」。第三言三摩地者「釈三十七尊引金剛頂經心又引摩訶般若經」説此甚深秘密瑜伽令修行者於内心中觀日月輪。又云 我見自心形如月輪。又云 一切有情於心質中有一分淨性。衆行皆備。其体極微妙皎然明白。乃至輪回六趣亦不変易。如月十六分之一。(三三七五頁。真蹟完)。

『一代五時系繼図』

一四十年諸經論嫌女人事

華嚴經云女人地獄使能断仏種子。外面似菩薩内心如夜叉文。又云一見於女人能失眼功德。縱雖見大地不可見女人文。銀色女經云三世諸仏眼墮落於大地法界諸女人永無成仏期文。華嚴經云見女人眼墮落於大地。何況犯一度墮三惡道文。十二仏名經云仮使遍法界大慈諸菩薩不能降伏彼女人極業障文。大論云女人見一度永結輪廻業。何況犯一度定墮無間獄文。往生礼讚云女人及根欠二乘種不生文。大論云女人惡根本也。一犯五百生彼所生処輪廻六趣中文。華嚴經云女人大魔王能食一切人。現在作纏縛後生為怨敵文。(二四二七頁。三宝寺本。録外御書)。

『御講聞書』

一 貧人見此珠其心大歡喜事

仰云此珠一乘無価宝珠也。貧人下根声聞也。惣一切衆生也。所詮末法入此珠南無妙法蓮華經也。貧人日本国一切衆生也。此題目奉唱者心大歡喜セリ。サレバ見宝塔云見此珠同事也。所詮此珠者我等衆生一心也。一念三千也。此經奉値時一念三千開珠見云也。此珠広一切衆生心法也。此珠体中アル財用也。一心三千具足財具足セリ。此珠方便品諸法実相説譬喻品大白牛車三草二木五百由旬宝塔共皆一珠妙法蓮華經宝珠也。此經文色心実相歡喜説ケリ。見此珠見色法也。其心大云心法也。色心共歡喜ナレバ大歡喜云也。所詮此珠云我等衆生心法也。仍一念三千宝珠也。所謂妙法蓮華經也。今末法入此珠顕事日蓮等之類也。所謂未曾有大曼荼羅コソ正一念三千宝珠ナレ。見字日本国一切衆生広一閻浮提衆生也。雖然其心大歡喜云時日蓮弟子檀那等信者サス也。所詮煩惱即菩提生死即涅槃体達其心大歡喜也。サレバ我等衆生五百塵点下種珠失五道六道輪回貧人ナル。近三千塵点下種捨備輪諸道。依之貧人成。今此珠奉値釈尊見付得本如取得タリ。

此故心大歡喜セリ。末法於当今妙法蓮華經宝珠受持奉己心見十界互具百界千如一念三千宝珠分明具足セリ。是併末法要法題目也云云。
(二五七四〜二五七五頁。新曾本。平樂寺版)。

2、転生

『守護国家論』

第二明雖受難受人身值難值仏法值悪知識故墮三悪道者。仏藏經云大莊嚴仏滅後五比丘。一人知正道度多億人四人住邪見。此四人命終後墮阿鼻地獄。仰臥伏臥左脇臥右脇臥各九百万億歳。乃至若在家出家親近此人並諸檀越凡六百万億人。与此四師俱生俱死在大地獄受諸燒煮。大劫若尽是四悪人及六百万億人從此阿鼻地獄転生他方大地獄中「已上」。(一一二頁。曾存。平賀本)。

『曾谷二郎入道殿御報』

疑云汝分齊に何以破三大師乎。答云予敢不破彼三大師也。問云汝上義如何。答云自月氏所渡漢土本朝經論五千七百余卷也。予粗見之於弘法・慈覚・智証者世間且置之。入仏法者謗法第一人々申也。誹謗大乘者從射箭早墮地獄者如来金言也。將又謗法罪深重弘法慈覚等一同定給畢。人語且置之。釈迦多宝二仏金言不虛妄者於弘法・慈覚・智証者定入無間大城。十方分身諸仏舌不墮落者日本国中四十五億八万九千六百五十九人一切衆生如彼苦岸等弟子檀那等墮阿鼻地獄於熱鉄上仰臥九百万億歳伏臥九百万億歳左脇臥九百万億歳右脇臥九百万億歳如是罪熱鉄上三千六百万億歳然後從此阿鼻転生他方有大地獄。無数百千万億那由佗歳受大苦惱。彼以小乗経破権大乘受罪如是。況今三大師以未顕真実経非破三世仏陀本懐之説剩失一切衆生成仏之道。深重罪過現未來諸仏争可窮之乎。争可救之乎。
(一八七三〜一八七四頁。日興本。録外御書)。

3、流転生死

『総在一念鈔』

縦ひ唯識観を成といえども、終には実相観の人に成也。故に義例云〔妙楽釈〕本末相映事理不二と云へり。本者実相観、末者唯識観、事者唯識観、理者実相観也。此不思議観成ずる時、流転生死一時に断壊して果位に登也。是を事理体一の不思議の総在一念と云也。此性具を顕して観音は三十三身を顕し、此理具を照して妙音は三十四身を現ずる者也。(八二頁。本満寺本。録外御書)。

『十王讚歎鈔』

夫十王と云事は、本地は皆是久成の如来、深位の薩埵にてありといへども、

流転生死の凡夫を悲んで、且く柔和忍辱の形を隠し仮に極悪忿怒の姿を顕して衆生の冥途に趣く時、中有冥闇の道に坐して初七日より百箇日、一層忌、終り第三年に至まで、次第に是を請取て、其罪業の軽重を勘へて未来の生処を定め給ふ。是を奉名十王。凡菩提薩埵の利生區にして、互に勝劣なしといへども、此御方便殊に以神妙也。其故は如此糾明在さずんば、誰人か罪業を恐るべき。不畏豈生死解脱の道有んや。(一九六六〜一九六七頁。三宝寺本。録外御書)。

四、日蓮聖人の前世観

1、仏の本生譚

釈尊の前世

能施太子 儒童菩薩 尸毘王 薩埵王子 その他
仏の偉大性 功德の絶大性

2、諸師の前世・再誕説

南岳大師―観世音菩薩
天台大師―薬王菩薩
聖徳太子―救世観音
奇跡 善業 威徳 偉大性 神聖性 神秘性

3、日蓮聖人と上行菩薩

弟子・檀越の認識

日蓮聖人の尊称

「聖人」「日蓮聖人」「日蓮大聖人」「日蓮阿闍梨」「高祖大聖人」「先師日蓮大聖人」「法主聖人」「法華聖人」「法花聖人」「御経日蓮聖人」「宗祖」「祖師」「祖師大師」「蓮祖」「高祖」「先師」「本師」「師匠」「大聖」「御経」「仏」「ほとけ聖人」「仏聖人」「上人」「上行菩薩」

日蓮聖人の自覚

日本第一の法華経の行者
本化地涌菩薩
本化上行菩薩

4、過去世の下種結縁

法華經如来寿量品第十六

父の良医―久遠実成の仏

失心の幼稚―久遠の愛子

無始久遠の過去世における下種結縁

5、宿罪の自覚

法華經常不輕菩薩品第二十

常不輕菩薩の値難と滅罪

日蓮聖人における宿罪の自覚と値難滅罪

6、乙御前母（日妙尼）の宿善

『乙御前母御書』

をとごぜんのは、日蓮いまは法華經をしのばせ給て仏にならせ給べき女人なり。かへすがへす、ふみ（文）ものぐさき者なれども、たびたび申候。又御房たちをもふびん（不便）にあたらせ給とうけ給。申ばかりなし。なによりも女房のみ（身）として、これまで来て候し事。これまでながされ候ける事は、さる事にて御心ざしのあらわるべきにやありけん、ありがたくのみをぼへ候。釈迦如来の御弟子あまたをはし、なかに、十大弟子とて十人ましまし、が、なかに目犍連尊者と申せし人は神通第一にてをはしき。四天下と申て日月のめぐり給ところを、かみすぢ（髮筋）一すぢき（切）らざるにめぐり給き。これはいかなるゆへぞとたづぬれば、せんしやう（先生）に千里ありしところをかよいて仏法を聴聞せしゆへなり。又、天台大師の御弟子に章安と申せし人は、万里をわけて法華經をきかせ給き。伝教大師は三千里をすぎて止観をならい、玄奘三蔵二十万里をゆきて般若經を得給へり。道のとをきに心ざしのあらわるるにや。かれは皆男子なり。権化の人のしわざなり。今御身は女人なり。ごんぢち（権実）はしりがたし。いかなる宿善にてやをはすらん。昔女人すいをと（好夫）をしのびてこそ或は千里をもたづね、石となり、木となり、鳥となり、蛇となれる事もあり。

十一月三日

日蓮

〔花押〕

をとごぜんのは、

をとごぜんがいかにかにひととなりて候らん。法華經にみやづかわせ給ほうこう（奉公）をば、をとごぜんの御いのちさいわいになり候はん。

（七五四―七五六頁。真蹟完）

今生における乙御前母（日妙尼）の強盛な信仰―宿世の善業

7、国府入道夫妻の宿善

『こう入道殿御返事』

あまのりのかみぶくろ二、わかめ十でう、こも（小藻）のかみぶくろ一、たこひとかしら。人の御心は定なきものなれば、うつる心さだめなし。さどの国に候し時御信用ありしだにもふしぎにをぼへ候しに、これまで入道殿をつかわされし御心ざし、又国もへだたり年月もかさなり候へば、たゆむ御心もやとうたがい候に、いよいよいろ（色）をあらわし、こう（功）をつませ給事、但一生二生の事にはあらざるか。此法華経は信がたければ、仏、人の子となり、父母となり、め（妻）となりなどしてこそ信ぜさせ給なれ。しかるに御子もをはず、但をやばかりなり。其中衆生悉是吾子経文のごとくならば、教主釈尊は入道殿・尼御前の慈父ぞかし。日蓮は又御子にてあるべかりけるが、しばらく日本国の人をたすけんと中国に候か。宿善たうとく候。又蒙古国の日本にみだれ入る時はこれへ御わたりあるべし。又子息なき人なれば御としのすへには、これへとをぼしめすべし。いづくも定なし。仏になる事こそつゐのすみかにては候へとをもひ切せ給べし。恐恐謹言。

卯月十二日

日蓮 「花押」

こうの入道殿 「御返事」

（九一三〜九一四頁。真蹟完）

教主釈尊は一切衆生の慈父。

教主釈尊は国府入道夫妻の慈父。日蓮は国府入道夫妻の子供。

教主釈尊と国府入道夫妻と日蓮との関係―宿善

五、日蓮聖人の来世観

1、来世の果報

『開目抄』

日蓮が流罪今生小苦なればなげかしからず。後生には大薬をうくべければ大に悦し。（六〇九頁。曾存）

値難得証

後生の救い

2、靈山往詣

『観心本尊抄副状』

乞願歴一見末輩師弟共詣靈山浄土拝見三仏顔貌。恐恐謹言

文永十年「太才癸酉」卯月二十六日

日蓮

〔花押〕

富木殿 「御返事」

(七二二頁。真蹟完)

靈山浄土に往詣して三仏の尊容を拝する

『国府尼御前御書』

しかるに尼ごぜん並に入道殿は彼の国に有時は人めををそれて夜中に食ををくり、或時は国のせめをもはばかり、身にもかわらんとせし人々なり。さればつらかりし国なれども、そりたるかみ(髪)をうしろへひかれ、すゝむあし(足)もかへりしぞかし。いかなる過去のえん(縁)にてやありけん、をぼつかなかりしに、又いつしかこれまでさしも大事なるわが夫を御つかい(使)にてつかわされて候。ゆめか、まぼろしか、尼ごせんの御すがたをばみまいらせ候はねども、心をばこれにとこそをばへ候へ。日蓮こい(恋)しくをはせば、常に出る日、ゆうべにいづる月ををがませ給。いつとなく日月にかけをうかぶる身なり。又後生には靈山浄土にまいりあひまいらせん。

六月十六日

日蓮

〔花押〕

さどの国のこのの尼御前

(一〇六三頁。真蹟完)

靈山浄土における再会

後生の安心

3、阿仏房の成仏

『千日尼御返事』

されば故阿仏房の聖靈は今いづくむにかをはすらんと人は疑とも、法華経の明鏡をもつて其の影をうかべて候へば、靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むきにはすと日蓮は見まいらせて候。

(一七六一頁。真蹟完)

後生の成仏の確信

むすび

大乘仏教

一切衆生悉有仏性

法華經

一仏乗。諸法実相。十界互具。十界皆成。一念三千

天台大師

十如実相。迹門の一念三千

日蓮聖人

十界互具。本門の一念三千

前世の結縁

久遠下種―久遠の愛子

前世の行業

善業―善根功德。次生に法華經に値遇

悪業―罪惡。経歴

今生の行業

純縁―法華經信仰。値難得証。宿罪消滅。―下種即脱益

逆縁―法華經に違背。法華經の行者を誹謗。謗法。―下種益(逆縁下種)

来世の果報

法華經信仰者―靈山往詣

謗法者―経歴。墮惡

法華經信仰

六道輪廻を解脱

三世にわたる救いの実現

三世にわたる救いの世界

本時の娑婆世界

大曼荼羅

主な参考文献

梅原猛著『地獄の思想』中央公論社。昭和四十二年六月

仏教思想研究会編『因果』平樂寺書店。昭和五十三年二月

日本仏教学会編『仏教における生死の問題』平樂寺書店。昭和五十六年十月

福原亮巖著『業論』永田文昌堂。昭和五十七年四月

網野善彦・他著『中世の罪と罰』東京大学出版会。昭和五十八年十一月
大法輪閣編集部編『輪廻転生』大法輪閣。平成十年十一月
増谷文雄・他稿「業について」『知恵と慈悲』所収。昭和四十三年十月
「仏教と死後の世界」『大法輪』第四十七卷第十号。昭和五十五年十月
「輪廻転生とは何か」『大法輪』第六十卷第二号。平成五年二月
「仏教は生まれ変わりを説くか」『大法輪』第六十六卷第五号。平成十一年五
月